【50】

氏　名（本籍）	宮城（みやぎ）　信（しん）（沖縄県）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博甲第 4864 号
学位授与年月日	平成 20 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**現代日本語の様態修飾関係の研究** **－情態修飾成分の意味と機能分析を中心に－**

主　査	筑波大学教授	博士（言語学）	矢澤真人
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	大倉　浩
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	沼田善子
副　査	筑波大学准教授		橋本　修
副　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	那須昭夫

論文の内容の要旨

本論文は，現代日本語における様態修飾関係のうち，過程のあり方を表す修飾関係について検討を加え，下位分類を試みるとともに，分類の基準となる素性について詳細な分析を試みたものである。

従来，過程のあり方を表す修飾関係については，様態の修飾関係の一種として，連続動作を表す修飾関係，進展を表す修飾関係，相互行為を表す修飾関係など，それぞれ個別に考察されてきた。本論文では，これらの修飾関係の表す表現に共通性があることを見いだし，それを素性の形で抽出することによって，より横断的な分析法を提示している。さらに，コーパスによる実態調査を行い，演繹的手法だけでなく帰納的手法を重ね合わせることによって，それぞれの修飾関係や個々の副詞的修飾成分に対しても，相違点が明確になるような分析を試みている。これらの検討を踏まえた上で，従来，分類が不明確であった完全性を表す修飾成分の分析や，モノの修飾とコトの修飾の双方に用いられる副詞的修飾成分の分析にも，この手法を応用する。これにより，情態修飾関係全体にわたって，素性分析の手法が有効であることを示す。

本論文は，以下の構成を取る。

「第 1 章　序論」では，本論文で扱う課題を示すとともに，研究対象となる「過程のあり方を表す修飾関係」の規定を行う。次いで，本論文の目的と意義，全体の構成を示す。

「第 2 章　先行研究の検討」では，先行研究を概観・検討し，問題点とそれを解決するための手法を提案する。

「第 3 章　過程のあり方の表現」では，過程のあり方を表す修飾関係を規定するとともに，時間の経過に並行して進行していく種々の動きのあり方を分類し，それぞれを素性分析によって位置づける。

「第 4 章　進展の表現」では，「どんどん」や「だんだん」などの副詞的成分に関して，実例の数量的調査を試み，それぞれの副詞的成分は異なった分布をしていること，進展のタイプごとに共起のしやすさに偏りがあることを指摘し，その偏りによって，それぞれの副詞的成分が連続的に位置づけられることを述べる。

「第 5 章　進展と配分の表現」では，副詞的成分「少しずつ」とその表現について考察を加え，「少しずつ」

の表現が，累積と配分を表し分けることを示し，この違いが動作の「限界性」や「主体の入れ替え」,「継起性」という素性の有無によって決定されることを述べる。

「第 6 章　循環の入れ替えの表現」では,「互いに」や「相互に」などの副詞的成分について考察を加える。副詞的成分が共起することによって表される複雑な相互行為のあり方を整理し，相互行為の下位分類を試みるとともに,「相手意識の強さの程度」（相互性）という素性を立てて分析することによって，これらの副詞的修飾成分が連続的に位置づけられることを述べる。

「第 7 章　完全性の表現」では，従来の修飾関係論では位置づけが困難であった,「完全に」「すっかり」など，完全性を表す修飾成分による修飾関係について検討を加える。完全性の修飾関係は，様態と程度との複合的な表現であり,「成立の完全性」「様態の完全性」「計量的完全性」という表現の型を組み合わせることで,「完全に」「すっかり」「きれいに」「全部・最後まで」などの共通点と相違点が明確に記述できることを示す。あわせてこの表現の型が他の程度表現にも応用できることを示す。

「第 8 章　モノとコトに関わる表現」では,「あざやかに」が構成する修飾関係には，5 つの型があることを示し, これらが「モノ性」「完了時出現性」「動作主指向性」の 3 つの素性により分別されることを示す。

「第 9 章　結論」では，各章における結論を整理したのち，連続動作や進展，相互行為など，過程のあり方を表す修飾関係の型と，それぞれの表現を規定する副詞的成分について，横断的な素性分析を試み，全体像の記述と整理を行う。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の第一の成果は，従来，個別に記述されてきた連続動作，進展，相互行為などの修飾関係について，横断的な分析方法を提示した点である。素性分析という手法は，従来も多く取り入れられてきたが，著者は，用例の丁寧な観察と分析により,「量性／質性」「断続性」「入れ替え性」「継起性」「累積性」といった，より的確であると見なされる素性を抽出し，それらを組み合わせることで，諸々の修飾成分の横断的な分析を可能にした。さらに，これらの素性間の関係を検討することにより,「継起性」と「量性／質性」「入れ替え性」が基層をなす素性であることを明らかにしている。

本論文の第二の成果は，従来の研究において，十分に用法の記述がなされてこなかった数多くの語句が正確に記述されたところにある。これまでにも, 連続動作を表す修飾成分（「次々に」「続々」「くりかえし」など）や，進展を表す修飾成分（「徐々に」「次第に」「ますます」など），相互行為を表す修飾成分（「互いに」「相互に」「かわるがわる）など」といった括りがなされ，それぞれに所属する語句の用法についても一通りの説明はなされていた。しかし,「徐々に」「次第に」「ますます」の使い方は，それぞれどう違うのかについては，直感的な説明がなされる程度であった。著者は，コーパスから多くの用例を集め，丁寧に分析することにより，これらの語句の用法の差異を示している。弁別にあたっては，言い換えテストや，定型文への挿入テストのほか，計量的な割合や用法の分布など，さまざまな手法を用いて，その違いを明示している。

本論文の第三の成果は, 単語の語彙的意味と修飾関係の型とを結びつけた点にある。修飾関係論ではパターン化を推し進めるところから，個々の語句の語彙的な意味については，微細な意味の違いは捨象する嫌いがあった。本論文では，個々の単語の用法を丹念に検討し，他の語句との共通点や相違点を「素性」としてとらえ，これを組み合わせていくことにより，語彙的な意味から修飾関係の型までの道筋を付けることに成功している。

本論文は，個々の語句の用法分析から抽象的な分析に及ぶ広範な考察であるため，残された課題も少なくない。第一の課題は, 素性の立て方にまだ改善の余地があるという点である。本論文の内部では整合性を保っているが，今後，適用範囲を広げていくと，素性間の衝突や矛盾などが生じてしまう可能性は，払拭しきれ

ない。第二の課題は，個別の語句や個々の修飾関係の型の記述に重点を置いたために，「過程のあり方の修飾関係」というカテゴリーの位置づけが分かりにくくなってしまった点である。素性分析によって，個々の語句の用法や「過程のあり方の修飾関係」に含まれる修飾関係については明確になったが，一方で，本論文で立てられた素性が上位のカテゴリーや同列のカテゴリーにも適用できるため，これらとの境界や関係が不分明になった面がある。本論文は，常に，型の分類をしながら，素性分析による型の解消を目指すという，相反する面を併せ持つ。行き着くところ，当初前提とした「過程のあり方を表す修飾関係」ばかりでなく，上位のカテゴリーである様態修飾関係や情態修飾関係などについても，再検討が必要になる。

しかしながら，第一，第二の課題とも，本論文の成果を元に考察を進めていくことによって解決される類の問題であり，本論文の学位論文としての高い価値をおとしめるものではない。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。